

「九州社会福祉研究」第41号（2017年）抜刷

ないものはつくろう

柴田裕介

ないものはつくろう

柴田裕介

1. 事業所・事業内容の紹介

私どもの法人は平成21年5月に設立し、8年目に突入した。現在、宮崎市に就労継続支援A型事業所（雇成型）に2事業所、就労継続支援B型事業所（非雇成型）に1事業所、相談支援事業所を宮崎市に1事業所と福岡市に1事業所で行っている。

2. 独立起業に至った経緯

1) 学生時代のこと

高校で介護福祉について学び、担任の先生から西九州大学に進学し、福祉の教員免許を取得し母校に帰ってくることを勧められ、断ることも出来ない先生の思いで進学を決め、介護については学んできたが、社会福祉がどのような仕事をすることも分からず進学をした。入学後は、両親から「しっかり学校に行きなさい」と言われ、大学の近くのアパートで一人暮らしを行い、青や金髪等、様々な髪型の色を経験したが、月曜から日曜日まで学校で過ごす事が多かった。今振り返ると、私の起業の原点は学生時代にあると思っている。親元を離れ知らない土地で一人暮らしを始めたが、大学に入学して最初に困った事は、友達をどのように作ったら良いかということだった。その当時は、資格がこれからは大切だと言われ、福祉に対する社会の期待なども取り上げられることが多く、社会福祉学部は一年に180名もの学生が在籍していた。県内に私立大学が1つしかないと言う事もあり、同じ高校や同じ地元の出身者で固まっている学生がほとんどで、違う地域から来た私のような学生には彼らの輪の中に入って行くのが難しかった面があった。そのような環境の中で、友達や学生生活を楽しく過ごすためには何を行ったら良いかを考え、サークルに入る事を決意した。将来就職をする中で、自分にはどの分野が向いているのか4年間でしっかりと考えたいと思い、様々な分野の

サークル（環境・学園祭・地域・精神・身体・児童など）に所属した。2年生になってからはいくつかの団体で代表をさせていただき、組織を回すことや、皆で協力し同じ方向の目的に向かって進む事の大切さを学んだ。その経験を踏まえ、コースに分かれる際には学生に教えることについては自信がなかったため、幅広い分野で福祉の勉強や資格を取得したいと考えて精神保健福祉の専攻を選択した。また3年生の時には友達や先輩に声を掛けてサークルの立ち上げをさせていた。今振り返ってみると、この事が私にとっての初めての起業だった。

精神保健福祉士の実習では、病院だけではなく地域移行が今後の課題だとすることを学び、先生にお願いして地元の社会福祉法人が行っているお弁当屋に10日ほど実習に行き、その最終日になぜか就職が決まった。

2) 就職後のこと

平成20年3月に西九州大学を卒業し、宮崎市にある地域活動支援センター1型に就職した。学生時代は佐賀市にあるセンターに訪問していたこともあり、将来は利用者の方々に相談や活動の場が提供出来るセンターで働きたいと希望していたが、その夢が叶った。初めての就職ということもあり、研修や先輩と一緒に行動しながら業務を学んでいこうという意識をもって着任したが、現実とは違いい階にある交流室に1人で配置された。当時のセンターは、2階に事務所があり相談窓口なども2階だったためスタッフが交流室に常駐していなかったそうだが、トラブル等を踏まえつつ、おもてなしの精神を大切にしたいという法人側の思いから交流室の担当者を配置することが決まり、そこで私が抜擢されたようであった。施設長からの指導を受ける際に印象深かった言葉は、「あなたは、利用者がいなくても常に1階にいなさい」「お昼も御飯は1階で食べなさい」であった。配置された当初は、利用者の方々の中にも常にスタッフがいることに対して苦痛を感じられる方もおられ「センターの方針かもしれないが話しかけないでください」と、私がそこにいることをなかなか認めていただけない方もいた。その中で、精神科に通院されている方に対する話し方や気持ちに寄り添う事を学んだ。また、業務を遂行していく中で、利用者との関わり方やコミュニケーション以前に、普段ほとんど接する機会のないスタッフとの関わり方について分からなくなった。今振り返ると自分のメンタル面の弱さだったのかもしれないが、当時は大きな悩みであり、このままでは自分のほうが精神的に体調を崩すのではないかと思ったほどである。やがて利用者の方々から「あなたが一番話しやすい」と言っ

て頂けるようにもなり、そろそろ自分を見つめなおしたいと思い退社を決意した。退職届を出してからはスタッフの方々にも自分の気持ちを伝えることができ、今でも困った時には助けてくださる存在になっている。この経験を踏まえ、働く上でのメンタル面の大切さや、悩んだ時には同僚には伝えていくことの大切さを学んだ。

働くなかで、なぜたくさんの実習生から私を雇ってくださったのかを尋ねたことがある。その時に言われたのは、①利用者からの推薦（話しやすい存在だったこと）②作業を利用者の方の隣で一緒に行う際、多くの実習生は話や自分の作業に夢中になりすぎて、利用者の作業の様子や表情を把握していない人が多いそうだ。私にはそれが出来ていたことが採用のポイントになったそうである。介護の勉強からスタートしていたこともありそれは無意識に身につけていたように思う。この事を踏まえて、特に②は従業員教育において重要視するポイントとなっている。

研修もなく、初日から一人で業務を行っていた社会人1年生は、法人内では私だけだ、とある方から言われた。最初は不安で自信がなくどのように成長すれば良いか分からなかったが、施設長自身が宮崎県内で1番古い精神保健福祉士として、資格がない時代から先輩もいなく精神科の病棟に1人で業務や患者との関わり方を見つけていった方だそうである。そのような方だからこそ、あえて私一人を交流室に送り込み、利用者との寄り添い方を自力で学べるように育ててくださったのだと今では思っている。

3. 事業運営の工夫と苦勞

1) 行政との関係

平成21年3月に退社し、心も落ち着き再就職について検討する中で、やはり精神科に通院している方に対する支援をしたいと強く思っていた。その当時は障害者自立支援法が施行され、今まで障害別に運営されていた福祉施設（授産施設・福祉工場）が就労継続支援事業に移行されながら、ほとんどの事業所が、障害の特性に合わせた運営を行うのではなく3障害（精神・知的・身体）を受け入れるようになっていた。さらに宮崎市には精神科に通院された方に特化した事業所がほとんどなかった。そのような背景もあり、母親からさりげなく「なければ作ったら良いんじゃない」と言われ、事業所を立ち上げることを決意した。

事業所を作ることは簡単だと思っていたが、役所に行ってみてその難しさを知った。福祉を専門にした団体で、それに伴いしっかりと支援が出来、さらに売上げがないといけない。無認可の作業所からのスタートしか出来ないという現実には直面したが、前の職場で関わっていた保健師さん達が協力して下さり社会適応訓練事業の協力事業所（一般企業に2年間実習を精神科に通院した人が行う制度）の申請を行うことができた。1年半を掛けて利用者の方々とパンを売り歩いたり、喫茶店の収入を出しながら基盤を作り、就労継続支援A型の指定を受けた。

2) 資金について

資金については、事業計画書をしっかりと書き融資を受けてスタートした。現在は事業計画書がきちんとしていれば事業所の指定も受けやすくなっているが、その後の経営を成り立たせる事が大切である。

3) 地域との関係

私どもの事業所は、宮崎市の中心部の商店街にある。作業所を行う中で、一番気にしていたことは近隣の店舗の方々と関わる事が出来るだろうかという不安であった。特に不安を感じていたこととしては、中心市街地にあるなかで、私達の事業所の3軒ほど先が、宮崎県内の商業施設で一番地価が高いと毎年発表されることもあり、福祉施設が来ると土地の価値が低下すると思われて反対運動が起きるのではないかと懸念していた。実際に住宅地で高齢者のグループホームを作ろうとしたとき、また、ホテル街にあったホテルを精神科が買い取った際に大きな反対運動が起こっていたため、事業所運営には地域との関わりが大切であることを理解していた。そのため、利用者の方々と一緒に地域に受け入れてもらえるように、まずは作業前にアーケードのゴミ拾いや、清掃作業からスタートしてみた。最初は私たちしか行っていなかったが、徐々に近隣のお花屋さんや、洋服屋さんも加わって下さり、利用者の方々とはい挨拶も交わせるほど顔見知りになった。当時、ある利用者の方が「病気になるって初めて普通に接してもらえた」と話しかけて下さったので詳しく聞いてみると、それまでは病人として冷たい目で見られることが多かったが、病気や障がいを知っていても普通におはようと声掛けをしてくれて何より一緒に掃除をしている事が嬉しいと言われた。その言葉を聞いた時に、就労支援は事業所だけで行うのではなく、地域全体で行うことが大切だと痛感した。その経験から現在ではヤマト運輸のメール便の配達、事業所の

近隣のビルの清掃、お花屋さんのスタッフの方に講師として来て頂き、プリザーブドフラワーを作ったり、ラジオ局と一緒に毎週30分の福祉情報番組の制作など商店街の店舗に協力していただきながら、作業を生み出すことが出来ている。そして、その経験を活かしながら、ホワイト急便と一緒に店舗の運営や、神奈川県企業から指導を受け、ボランタリーチェーンとしてコーヒー豆屋の運営を商店街のなかでスタートすることもできた。

私どもの就労系の事業所は、全事業所で送迎を行っていない。B型事所につきましてもは開所当初は行っていたが、精神科に通院される方々の中には朝起きる事が苦手な人や、長時間働くことが出来ない人など様々な方がいるため、一人ひとりのニーズに合わせていた。1年が過ぎた頃に送迎でしか来られないと思っていた利用者の方がバスで来るようになり、彼女が出来たのだから自分も出来るのではないかという利用者の方や、送迎の待ち時間や車内での過ごし方が分からない等の意見が出始めた。そこから少しずつ送迎を利用していただいていた方々が公共交通機関や自転車等で出勤されるようになり、2年後には送迎の必要性が完全になくなった。私たち支援員としても、利用者の皆様に将来は一般就労等に出たいという思いがあった為、利用者の方々が自力で出勤できるようになった事は自立に一歩近づけたのだと感じている。また、これが実現できたのは、中心市街地という立地上、バスや電車等の公共機関の利便性が良かったことと、地域の方々に見守られていることが大きいと思う。これは、出勤途中で体調が悪くなった時に気にかけて声を掛けて事業所に連絡をして下さる地域の方々の姿、そして、救急車を呼んだ際に周囲の人達の誘導をして下さる姿を見て実感している。

4) 利用者との関係

開所当時は利用者の方々にどんな人がいいですかと尋ねながら支援員の配置を行いた。具体的には「お母さん的な存在が良い」「若い人は嫉妬してしまう」「あまりにも管理的になってほしくない」等の意見が出た。今、職員を入れる際にも、会社という意識を利用者の方々も多く持っているため、半分を福祉の専門職、半分を専門職以外の人を配置するように努力している。

平成23年に障害者施設に移行する際には、利用者の方々と話し合い、NPO法人に会社を切り替える提案を行ったが、「就労支援を受ける中でも会社に所属していることに意味がある」「自分たちが作ってきた会社を社長は潰すのですか?」といった利用者の方々の熱い思いを受けて、株式会社で継続していくこと

を決意し、継続して利用できる就労継続支援事業A型のサービスに移行した。

その後、2回の法律の改正を経験した。改正により新たに始まった制度や、事業者や精神科に通院されている利用者にとっては、マイナスになる事も沢山あったが、その都度対応したサービスの見直しや、作業について検討していった。24年の改正では、職員からは「A型で働けなくなった方々を次のステップに行く見送る支援は行いたい、そうではなくただ切るだけの支援はしたくない」、利用者からは「A型以外のサービスを作って自分たちが作ってきた会社で今後も働きたい」という意見が寄せられ、両者の意向を踏まえB型事業所を開所した。25年にはサービス等利用計画が必要になり、登録利用者一人ひとりにアンケートを取り、どの様な経緯で株式会社 SHIBA で働くようになったのか、利用者一人ひとりが関わっている関係機関などについて再度把握した。利用者の7割の方が病院やハローワーク、就業・生活支援センターを経由し、サービス等利用計画書が作成できない事業所の登録しなく、相談支援事業所を作ってほしいという要望を受けたため相談支援事業所を開所した。私どものA型事業所は県内で唯一、精神科に通院している方に特化した事業所として現在も運営している。特別支援学校の生徒さんを実習として受け入れた際、生徒さんから●●パンか、お菓子屋さんの☆☆で就職をしたいですと言われた。知的障害の彼女は過去に実習で経験した一般企業の事業所の名前を言われ、私どもの福祉施設の事業所は本人も家族も選抜肢に入れていない様子であった。しかし、10日間の実習を通して彼女の気持ちは変わり、最終日には「はぁとパン」で就職したいですと、社長である私に言ってきた。一般就労でない私達の事業所を選んでくださった事に嬉しさを感じ、何が良かったのか一緒に考えた。その結果、2つの会社では洗い物や接客等、限られた作業しかしておらず、パンを作りたいという彼女の意向に沿うものではなかった。

私達のパン屋さんは「日本一遅いパン屋さん」というキャッチコピーでやっている。普通のパン屋さんは朝2時頃よりパンを焼くのだが、私達は朝9時からパンを捏ね始め、14時に焼きあがるスタイルなのである。このように効率の悪い方法を始めたきっかけは、私自身、朝が弱いこともあるが、自分が利用者だったらと考えた時に、9時に出社した際に最後の焼き作業や袋詰めだけをするだけで満足できるかな、と考えたことにある。利用者の方々に何らかの形で全ての関わってほしいのでこの方式を選択した。また、私を含め皆が素人なので、安全にパン作りが出来るように家庭用の機材を使用し、安心安全な材料を使用しながら「家

庭でお母さんが子どもに食べさせたいパン」というコンセプトでスーパー等に卸しはじめた。彼女はそれまでの実習経験のなかで、初めてパン作りを行ったという気持ちになったようであった。卒業まで2年間を掛けて実習を行ったが、精神科に通院されている方々とのコミュニケーションや指示の理解が課題となり、卒業後はB型からスタートして焼き菓子や苦手な清掃作業に取り組んでもらった。こうして20歳を迎えた年に、スタッフから「どんな仕事も一生懸命に取り組み、お菓子等の作業もひとりで出来るようになったのでA型に行かせてあげたい」という声があがった。しかし、私どものA型は精神科に通院された方に特化した結果サポート体制が難しいと判断したことから、精神科に通院している人以外でも働きやすいパン屋さんのA型の指定を目指し26年に「ピアはぁと」を開所した。

4. これからのこと

平成28年11月現在、私どもは5つの事業所を運営し、その中で4種類の種別のサービスを行っている。これまで障がい者の就労支援と、計画相談に力を入れてきた。23歳で会社を作った私自身、30歳になり家庭を持ったことから、今までのように年に1箇所ずつ事業所を立ち上げるペースではリスクが大きいことを痛感している。さらに、制度改正ごとに影響を受けながらの事業所運営の大変さも感じている。その事を踏まえ既存の事業所の見直しや、充実させることが大切だと考えるようになっていく。また今後、就労支援は福祉サービスの充実以上に、一般就労に対する意識が国や支援機関からも求められていくだろうと見据えている。今の事業所を大切にしながらも、社会福祉士や精神保健福祉士などの専門職だからこそ深い理解を得られる場所として、障がい者の方々が一般就労出来る場所を私どもも作っていければと思う。

福祉の専門職である私に経営者が務まっているのも一人の力ではなく、皆様に協力していただき、支えられてきたからである。だからこそ今の会社があり、社長と呼んでいただく中で人としても成長できていると感じている。福祉を目的に仕事を行っていくにあたって一人の力では出来ないという事を今後も忘れずに、沢山の方々の出会いを大切にしながら経営者として会社と一緒に成長出来ればと思う。